

---

## 石井進さんを送る——三学協業を实践する人——

佐 原 真

---

1997（平成9）年8月23日、歴博講演会で石井進さんがいわば最終講義として「歴史家の夢」を語り、それに先だって私は石井さんを紹介した。その私の語りの内容をまず、以下にかかげる。

国立歴史民俗博物館長石井進さんが、8月31日でおやめになる事になった。

石井進さんは、1931（昭和6）年に生まれ、1950年東京大学に入り、1955年卒業、1964年文学博士、1960年東京大学史料編纂所事務官、1977年文学部教授。1992年歴博歴史研究部教授・副館長（企画調整官）、1993年3月館長となって現在にいたっている。

歴博の歴史に詳しい岡田茂弘さん（情報資料研究部）によると、石井さんは、1979年、歴博の設立準備委員会の専門委員となり、1980年から歴博の展示プロジェクト委員に加わり、また、1981年以来、運営協議員会委員をつとめられている由、歴博とのつきあいは長く、歴博は石井さんに久しくお世話になってきたことになる。

30代前半で抜擢されて『鎌倉幕府』（日本の歴史7 中央公論社 1965年）を書き、東国の農村から、どのようにして武士が生まれてきたかを明快に解き明かして評判をよんだ、と益田宗さん（前歴史研究部長）にうかがった。

私は、歴博にくるずっと前から、考古学をやさしくしよう、と提案して実践してきた。そして、およそ歴史家は、難しくしか書けない。書けない、というより書く姿勢をもたない、と思ってきた。

この偏見を砕いたのは、『中世を読み解く』（東京大学出版会 1990年）という本であった。題名だけをみて手にとると、古文書を解説するのだから内容は易しくはないけれども、です・まず調で書き、昔の文がわからない人にもわからせよう、という意欲で作っている。本の内容は、前期・後期に分れていて、その間に夏休みが入り、歴博の展覧会を見にきて——歴博にお出でになる前から歴博を宣伝して下さっている——A・B・Cさんとの会話が入る、という面白い構成になっている。一般市民にわかりやすく、という姿勢の人が歴史家にもいるのだ、と感激して表紙の著者名を見ると石井進さんだった。

中世史の小島道裕さん（歴史研究部）によると最近では『中世史を考える』（校倉書房 1991年）、『中世の村を歩く——寺院と荘園——』（朝日新聞社 週刊朝日百科 日本の歴史 1986年）など、注目すべきお仕事が数多くある。そして社会史の目で都市鎌倉をどうとらえるか、という新しい局面を開いておられる。また、だいぶ前の総理大臣が全国の町村にお金を配って「ふるさと創生」をやったことがあるけれど、石井さんは、日本各地の中世の城や

---

町を訪ねては、実質的な「ふるさとの創生」に情熱を注いでおられる。

中学生の時、柳田國男さんを訪ね、民俗学に進もうと目指しておられただけに、石井さんの民俗学への造詣の深さは大変なものだ。お客さんが見えて、館長・副館長が展示を案内することがある。考古の部分は私が説明してしまうため、石井さんの第1室の考古学の説明はうかがったことがなく、残念だ。しかし、第2～5室の説明は凄い。ある時、午前と午後それぞれ別の外国のお客さんがみえたことがある。一方は金融関係の人だった。すると石井さんは、金融関係に重点をおいて説明し、もう片方の人には全然違う説明をされるのだった。古代から近世まで日本史を説明出来るのは当然かもしれないけれど、民俗展示の説明も広く深い。

歴博は、せまい意味での歴史学（文献史学）、考古学、民俗学が、他の関連諸学と共に総合的な歴史学をうちたてることを目標としてきている。石井進さんは、日本中世史を専攻し、若くから民俗学に親しみ、考古学的成果を活用し、おひとりで三学協業を実践しておられるのだ。

今日の石井さんの講演の題名と同じ石井さんの『歴史家の夢——新しい博物館をめざして——』（歴博ブックレット2 1997年）の著者紹介に書いてある。「いつも笑顔を絶やさぬ、おだやかな人柄だが、案外にシンは強く、時に思い切った行動にでることがある。」その通り石井さんは、いつも笑い顔でいる。いつも笑顔の人なのだから、笑っているからといって安心は出来ない。いつも御機嫌で、同意したりほめているとは限らない。ニコニコ顔で会話の花を咲かせておられるので近づいてみると、痛烈な批判を展開中ということもある。

\* \* \*

今回、この文を綴るにあたって柳田國男さんとの出会いの新聞の随筆（「柳田國男先生」出あいの風景 東京朝日1994年10月11日）を探したところ、佐原貝塚に埋もれてしまっていてみつからない。重ねて頂戴したい、と石井さんをお願いしたところ、早速その記事と共に「日本民俗学の創始者 柳田國男」（『日本史を変えた人物200人』歴史読本600号記念臨時増刊 新人物往来社 1993年）、「柳田國男先生の思い出」（Sturm und Drang 東京大学昭和25年入学文科ⅡBクラス会記念誌）をお送りいただいた。15歳で柳田國男さんのところに通い始めて民俗学に傾倒した石井さんと、その翌年、やはり15歳で縄紋文化研究の大御所山内清男さんのところに通い始めた私自身とが重なりあった。

しかし、石井さんが東大を退く際に作った本『私本塵芥抄』（私刊 1992年）に収録してある「ミカリバアサンの日」（『民間伝承』第12巻第3・4合併号 1948年、石井さん17歳）、「郷土研究を進めるために」（『桐陰会雑誌』118号 1949年、石井さん18歳）をみると、内容も文章も民俗学研究者としてすでに一人前である。17、8歳の私は、とてもそこまで成長していなかった。梅檀は双葉より芳し、とは石井さんのための言葉なのだろう。

石井さんからは、「中世史研究と日本民俗学」（『成城大学民俗学研究所紀要』第19集

---

1995年)の別刷も頂戴した。かつて柳田國男さんは、歴史と民俗学とは、今にきっと一緒になるでしょうね、と発言したという。石井さんはそれを実現することに向っている。添えてあった石井さんからの手紙には、「『歴博フォーラム 中世商人の世界』(日本エディタースクール出版部 1998年)は、「中世史研究と日本民俗学」で述べたところの具体化でして、私としては歴博在職中のもっともよい仕事だったのではないかと考えています」と書いてあった。読まなければならない。

古代史の直木孝次郎さんからうかがった挿話を紹介したい。直木さんは、和歌を詠み、文学にも造詣深い。最近では『山川登美子と与謝野晶子』(塙書房 1996年)の著作がある。鉄幹をめぐる好敵手だった登美子がなくなった時、晶子が詠んだ挽歌のひとつに「この友はいく重心をもつ故に悲しとなげきねたしとわびぬ」がある。

「この友」つまり山川登美子は何重もの心をもっていて、本心をあらわさない、それがうらめしい、と直木さんは解釈した。ところが石井進さんから、手紙がきて「この友」は登美子の立場にたった友、つまり晶子だ、晶子には何重もの心がある部分では登美子に親しみ、ある部分では批判的だった。その心がうらめしい、と解すべきではないか、という意見を受け取った。そういわれると、20首ばかりの挽歌のなかで登美子のことは、「この君は」とよんでいる。「この友」は晶子なのだ、と直木さんは納得し石井さんの洞察力にいたく感服した、という話である。石井さんの広さ深さをしめして余りある。

昨年の石井さん最後の講演会を思い出し、今、また石井さんからの数々の資料をいただき、直木さんから挿話をうかがい、歴史・考古・民俗学および関連諸学の総合をめざす歴博からかけがえのない石井館長が去られたことの重い損失をあらためて噛みしめている。

幸いにして石井さんは、とてもお元気である。

三学協業を实践して、学界の指導的位置におられる石井さんが、ますますお元気でリュックを背に活躍されることを祈っている。歴博の強い味方が、外でニコニコ顔で見守っていてくださることを心の支えとしたい。

(国立歴史民俗博物館長)